様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月１９日現在

機関番号：14401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０４６６
研究課題名（和文）在日外国人の日本語学習支援ツール「日本語ポートフォリオ」を媒介とした支援者の学び
研究課題名（英文）What volunteer teachers learn by using the Japanese Language Portfolio, a tool to support resident foreigners to learn Japanese
研究代表者
青木　直子（AOKI NAOKO）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：２０１８４０３８

研究成果の概要（和文）：ボランティアが『日本語ポートフォリオ』をどのように使うかは、ボランティアの『日本語ポートフォリオ』への関心の度合いとともに、学習者側の要因にも影響されている。学習者側の要因には、ボランティアが『日本語ポートフォリオ』を使うことの障害になるものも、助けとなるものもある。ボランティアの『日本語ポートフォリオ』への関心の度合いは日本語教育についての専門知識があるかどうかとは関係がない。ボランティアへのアドバイジングには、ボランティアの学びを助ける機能がある。また自分の学習活動の録音を聞くことも学びを促進する。

研究成果の概要（英文）：The findings of this research are 1) the way volunteer teachers use the Japanese Language Portfolio depends on both their degree of interest in the JLP and learner factors; 2) Learner factors hinder or facilitate volunteer teachers' effort to use the JLP; 3) The degree of interest in the JLP on the part of the volunteer teacher has no correlation with the amount of specialized knowledge of teaching Japanese as a second language that s/he possesses; 4) Advising to volunteer teachers facilitate volunteer teachers' learning; 5) Listening to recordings of one's own interaction with a learner also facilitate volunteer teachers' learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：在日外国人、日本語学習支援、ボランティア、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、学習者オートノミー、自己主導型学習

１．研究開始当初の背景

(1) 日本には日本語を第二言語とする人たちが 200 万人程度居住していると考えられるが、その人たちの日本語学習機会は物理的にも質的にも保証されていない。

(2) 日本語学習機会の質的保証ができてい

ない原因の一つは、在日外国人への日本語学習支援を担う地域の日本語教室が適切な方法論を持っていないということである。従来、ボランティアによる日本語学習支援に関しては、ボランティアと学習者が平等な関係に立った異文化交流のために、お互いにコミュニケーションの仕方を学ぶべきだという議論と、市販の教科書を使って日本語を教えるべきだという二つの異なる議論があった。しかし、これらの議論はどちらも現実には機能しない。前者の問題は、交流活動が日本語だけで行われると、母語話者と非母語話者の力の不均衡が表面化して「平等」が実現できないばかりか、学習者の側の日本語を学びたいというニーズが犠牲にされるということである。後者の問題は、正式な教師教育を受けた教師が使うことを前提にして作られている市販の教科書を専門知識のほとんどないボランティアが使いこなせるはずがないということである。つまり、既存のアプローチは、どちらも学習の質を高めることはできない。実際に、こうした日本語教室の現状に不満を抱く学習者は存在する（青木, 2004; 周, 2007, 2010）。

(3) この問題を解決するために、研究代表者は学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフアクセス、会話パートナーとしてのボランティアをキーワードとした第三のアプローチを構想した。

(4) 『日本語ポートフォリオ』は、自己主導型学習のツールとして 2005 年に開発に着手し、現在８言語で使うことができる。

(5) パイロット調査（Aoki et al, 2006）によれば、すべての学習者が初めから一人で『日本語ポートフォリオ』を使えるわけではないので、日本語ボランティアが『日本語ポートフォリオ』を使ってアドバイジングのできる能力を身につけることが不可欠である。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本語ボランティアは『日本語ポートフォリオ』の使い方をどのように学んでいくか、その過程で必要なサポートはどのようなものかを明らかにすることである。

３．研究の方法

(1) 本研究は５名の日本語ボランティアを対象としたケーススタディである。5 名のボランティアに共通する条件は『日本語ポートフォリオ』に関心を持っていることである。なるべく多様なケースを集めるために、ボランティア経験の長さや、日本語教育に関する勉強をした経験の有無などが異なる人を選んだ。

(2) これら５名のボランティアに一人の学習者と『日本語ポートフォリオ』を使った学習活動を８回行ってもらった。学習者は、ボランティアが学習支援をしている人や、以前からの知り合いに声をかけて協力をとりつけてくれた。ただし、１名は、当初、協力してくれるはずだったボランティアが個人的事情で調査協力を辞退せざるを得なくなったので、この人が協力をとりつけていた学習者に、知り合いのボランティアを紹介した。

(3) 収集したデータは以下の通りである。

①事前インタビュー：『日本語ポートフォリオ』を使った学習活動を始める前にボランティアに半構造化インタビューを行った。質問事項は以下の通りである。

＊ボランティアを始めた動機やきっかけ

＊実際にボランティアを始めてから考え方は変わったか。変わったとすればどのように変わったか。それはなぜか。

＊この調査に参加することで得られると期待しているものは何か。

＊この調査について何か質問はあるか。

インタビューは IC レコーダーに録音し、テープリライターに文字化を依頼した。

②学習活動：ボランティアには、週に１回、学習者と話し合いの機会を持ち、学習計画を立てる手伝いをするように依頼した。学習者に、週の間にその計画を実行してもらい、次の週にまた新たな計画を立てるというサイクルを繰り返す。この話し合いを８回行ってもらった。

活動は IC レコーダーに録音してもらい、テープリライターに文字化を依頼した。

③ボランティアへのアドバイジング：学習活動各回の後に、ボランティアにその回何をやったかを日本語教育を専門とし、『日本語ポートフォリオ』の使用とアドバイジングの経験がある大学院生に、Skypeを使って報告をしてもらった。この大学院生の役割は、ボランティアのアドバイザーである。具体的に

やってもらったのは、ボランティアが学習活動で何が起きたかを詳しく思い出し、振り返るために質問する、次回の計画を確認する、どうしたらいいか困っている時には選択肢を提供する、前回の計画がどうなったかを確認することで、各回の活動に継続性が持てるように援助をすることである。

Skype での会話は Tapur というフリーウェアを用いて録音し、テープリライターに文字化を依頼した。

④事後インタビュー：8 回の学習活動が終わった後、できるだけ早い時期にボランティアに、『日本語ポートフォリオ』を使った経験について半構造化インタビューを行った。質問項目は以下の通りである。

* 調査が終わっての感想
* 何か学んだことはあるか。あるとすれば、どんなことか。
* 何か変わったことはあるか。あるとすれば、どんなことか。
* 学習者は何か変わったか。変わったとすれば、どんなことか。
* アドバイザーとのやり取りは役に立ったか。立ったとすればどんなふうにか。
* 次に『日本語ポートフォリオ』を使う時はどんなふうに使いたいか。

インタビューは IC レコーダーに録音し、テープリライターに文字化を依頼した。

４．研究成果

(1) 収集したデータは、一人一人のボランティアについて、事後インタビューを、８回のセッションで何が起き、ボランティアがどのようなことを問題だと感じ、それにどのように対処したのかという視点で読み込み、暫定的なストーリーラインを書いた。そして、そこで述べられている事柄を学習活動の録音の文字化、アドバイザーとの Skype セッションの録音の文字化とつきあわせて、ストーリーラインに補足を行った。最後に、事前インタビューも参考にし、それぞれの出来事や変化はなぜ起きたのかを考察した。

(2) 明らかになったことは以下の通りである。

① 『日本語ポートフォリオ』をどのように使ったかはボランティアによって大きく異なる。すべての時間をアドバイジングに使ったペアもあるが、ほとんどの時間を日本語での会話に費やし、『日本語ポートフォリオ』は部分的に使っただけのペアもある。この違いは、ボランティアの『日本語ポートフォリオ』への関心の度合いとともに、学習者の学習意欲や学習目的にも影響されている。

② ボランティアが『日本語ポートフォリオ』を使うことの障害になる学習者要因は次の 5 つである。A)学習者が日本語教室に来る第一義的な理由が日本語の学習ではない場合、B) 学習者の学習目的が日本語能力試験の受験など、『日本語ポートフォリオ』が前提とする言語能力観と相容れない場合、C) 学習者の学習目的が大学での研究活動など『日本語ポートフォリオ』が対象外としているものである場合、D) 学習者の目標とする言語能力が『日本語ポートフォリオ』がカバーしている能力より上である場合、E) ボランティアが学習者の母語を知らず、学習者の日本語能力がCEFRのレベルでB1 に達していない場合。

③ 逆に、ボランティアが『日本語ポートフォリオ』を使うことを助ける学習者要因は以下の 7 つである。A)もともと学習者オートノミーを持っている、B)日本語を学ぶ意欲が高い、C) 学習者が『日本語ポートフォリオ』の前提とする課題遂行型の能力観を持っている、D) 学習者の学習目的が日本での生活、就業である場合、E) 学習者の当面目標とする言語能力が『日本語ポートフォリオ』がカバーする範囲内（CEFRのB2 が上限）である場合、F) ボランティアと学習者の間に媒介となる言語があるか、学習者の日本語力がCEFRのレベルでB1 あるいはそれ以上ある場合、G) 学習者がボランティアとの関係を先生と生徒という上下関係であると認識していない場合。

④ボランティアの『日本語ポートフォリオ』への関心の度合いは、日本語教育に関する専門知識をもっているかどうかとは関係がない。

⑤ ボランティアへのアドバイジングは、以下の 5 点において、ボランティアの学びを助けている。A) 活動の詳細な報告をしなくてはならないために、振り返りを促す、B) 様々な意志決定について、学習者の意向を聞いたかどうかを確認することで、ボランティアが学習者の自己主導型学習を十全に支援しているかどうかの気づきを促す、C) 前回の計

画がどうなったか、次回はどうするつもりかを質問することで、Plan-Do-Seeのサイクルを作るのを助ける、D) リソースや学習方法についての選択肢を提供する、E) 活動がうまく行っていない時の感情的なサポートを提供する。
⑥ボランティアには他に以下のような情報を提供する必要がある。A) 1回のセッションの時間管理の方法、B) 『日本語ポートフォリオ』を使い始めてから、回数を重ねていくうちに、1回のセッションのうちのアドバイジング部分と言語学習部分の時間配分がどのように変わっていくか、C) 学習者がPlan-Do-Seeのサイクルを作るために『日本語ポートフォリオ』の複数のセクションをどのように関係づけるか。
⑦ 自分の学習活動の録音を聞くことがボランティアの気づきを促す。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①青木直子、「学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフ・アクセス」日本語教育通信38号、(2010)、査読なし
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/tsushin/reserch/index.html
②青木直子、学習者オートノミーを育てるアドバイジング、ヨーロッパ日本語教育、13号、(2009)、28-35、査読なし
③青木直子、学習者オートノミーを育てる教師の役割、英語教育、56巻、(2009)、2月号 10-13 、査読なし
④青木直子、日本語を学ぶ人たちのオートノミーを守るために、日本語教育、138 号、(2008)、33-42 、査読なし

〔学会発表〕（計８件）
① Aoki, N. The role of advisor in advisor training. The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education. 16 December 2010. Hong Kong Institute of Education.
② Aoki, N. Volunteer teachers learning to advise. The 10th Nordic Workshop on Autonomy in Foreign Language Classrooms. 27 August 2009. University of Bergen. Kingdom of Norway.
③Aoki, N. Three levels of social context: A framework to explore social aspects of learner autonomy. Language for Life: A Symposium in honour of Professor David Little. 13 December 2008. Trinity College, Dublin. Republic of Ireland.
④青木直子、『日本語ポートフォリオ』とアドバイジング、日本語教育学会 2008 年度第 7 回研究集会、2008 年 9 月 20 日、甲南大学(兵庫県)
⑤青木直子、学習者オートミーを育てるアドバイジング、第 13 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2008 年 8 月 27 日、チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学、トルコ

〔図書〕（計３件）
①青木直子・中田賀之（編著）、ひつじ書房、学習者オートノミー：日本語教育と外国語教育の未来のために、(2011)、1-22, 241-263, 265-266
②中島晶子・鬼頭夕佳（編著）、フランス日本語教師会、授業が変わる：CEFRと学習者オートノミー、(2010)、61-77
③Kjisik, F., Voller, P., Aoki, N. & Nakata, Y. (Eds.), Tampere University Press, *Mapping the terrain of learner autonomy: Learning environments, learning communities and identities,* (2009), 7-18, 236-261

〔その他〕
ホームページ等
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/

６．研究組織
(1)研究代表者
青木　直子（AOKI NAOKO）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：２０１８４０３８

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
大河内 瞳（OKAWACHI HITOMI）
大阪大学・大学院文学研究科・科目等履修生

北澤　美樹（KITAZAWA MIKI）
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程学生

呉　琴（GO KIN）
大阪大学・大学院文学研究科・博士前期課程学生

瀬井　陽子（SEI YOKO）
大阪大学・文学部・科目等履修生

前川　陽子（MAEGAWA YOKO）
大阪大学・大学院文学研究科・博士前期課程修了

脇坂　真彩子（WAKISAKA MASAKO）
大阪大学・大学院文学研究科・博士後期課程学生